

【佳作】

母の笑顔

東田 悠花（長野県 信州大学教育学部附属長野中学校 3年生）

「今日の学校はどうだったの。」

母は、私が学校で何か辛い思いをした日に限ってこう聞いてくる。私は学校での事を母に気付かれないように平静を装っている積もりだが母には何時も御見通しだ。

私には、忘れられない出来事がある。

中学二年生のある夏の日の事だ。その日の部活で近くに迫ったある合唱コンクールのオーディションをした。顧問の先生が部員一人一人の声を聞いてまわり、ステージに立つメンバーを決める。私は、小学生の時から合唱をやっていたので、自分にすこし自信があった。いよいよ、目の前に先生が来た。私はいつもよりお腹に力を入れて歌った。「たぶん大丈夫だろう。」そう思っていた。

部活もあと少しで終わりになるという時間になったところで、先生は部員を集めた。そして、

「聞いていて、成長している人がたくさんいると純粹に思いました。だから、今まで上手かった人も落とします。落ちた人は死ぬ気度が下がってきて下さい。じゃあ、三年生からメンバー言ってきます。」

と言って、名前を呼びはじめた。

「……次に二年生を言っていきます。」

私は自分がメンバーになることしか想像していなかった。しかし、最後まで私の名前は呼ばれなかった。「まさか。」と思った。「他の同じ学年の子はほとんどメンバーなのに。」頭が真っ白になった。

「じゃあ、メンバーだけで歌ってみるので、メンバー以外の人は座って聞いてて。」

先生が言った。曲が始まった。みんな良い顔をして歌っている。泣きたかったけれど、必死に我慢した。

部活が終わった後、友達は何も話しかけてこなかった。先生が私の前に来た。そして、

「東田、最近停滞してるよ。このままじゃ、みんなに置いてかれるよ。」

と言って去っていった。私は「はい。」としか言えなかった。「がんばっているつもりなのにどうして。」これから何を直せばいいのか、何を頑張ればいいのか、分からなかった。

通学路の別れ道でやっと一人になれた時に、ふと頭に家族の顔が浮かんだ。「この前、お父さんとお母さんが『ゆうちゃん、今年のコンクール楽しみにしてるからね。ホールに聞きに行くからね』って言ってたっけ。」「家族になんて言おう。」とても苦しかった。

家に帰ってから、自分の部屋に籠もった。今日の部活の事が頭の中で何度もリピートされる。先生に言われた「停滞」という二文字が体に押し掛かってくる。

「ガチャ」戸の鍵が開く音がした。母だ。

「ただいま。」

「おかえり……。」って言いたいけれど、母の顔を見たら、今日の事がバレそうで言えなくて、聞こえていないフリをした。夕食では、テレビに釘付けになっているフリをした。クルシイ。ツライ。部活やメタイ。自信を持っていた自分がニクイ。

私が風呂から出てきた時、母は、

「今日の学校どうだった。」

と聞いてきた。私は、

「普通。」

と答えた。

「普通ってどんなところが普通なの。」

バレたようだ。でも母にあの事は話したくない。私は何も言えなかった。

「友達のことなの。先生に何か言われたの。クラスのことなの。部活のことなの。」

母の質問攻め。ウルサイ。ダメッテテ。でも、もう隠せないと思って、今日あったことを話した。「ごめんね。お母さん。」心の中で何度も謝った。しかし母は、

「ゆうちゃん、メンバーになれなくても、他にできること、あるはずだから、頑張ってみな。先生はゆうちゃんを育てたいんだよ。」と言ってくれた。そして母は、テレビの芸人が言った言葉を声を出して笑った。無理して笑っているのはすぐに分かった。母も辛くて悲しかったはずなのに。母なりに私を安心させたかったのだと思う。

私は母が本当に大好きだ。楽しい時も辛い時も笑ってくれる母が大好きだ。私も誰かを笑って救いたい。そして、家族、友達、母を一生大切にしたい。私のために怒ってくれる誰かに感謝したい。母のような女性になりたい。必要とされる人間になりたい。

……

お母さん、本当にありがとう。これからもよろしくね。

この言葉は母に直接言ったことがない。しかし、いつか、絶対に言いたい。心からの笑顔で。